

「馬鹿よね、あの子。ギルベルトの告白を真に受けているなんて！」

「まだ続けているの？　嘘告白の罰ゲーム」

忘れ物をして放課後の教室に戻った際。閉じられた扉越しに、嫌な話し声が聞こえてきた。

教室にいるのはおそらく、クラスメイトである典型的な貴族令嬢達だ。産まれながら血統第一の教育をされてきた彼女達は、特権意識が強い。貿易商の娘の私なんか、彼女達からすれば成金娘である。

普段から嫌味や陰口を言われることはままあったが、今日の様子は少し違った。優越感に浸ったクラスメイトの言葉に、思

わず私は扉の前で硬直してしまふ。

……嘘告白？ 罰ゲーム？

確かに私はギルベルトと付き合っているけど……まさか彼が、そんな悪質なことをするはずが――

「らしいわ。私達、昨日ギルベルトから聞いたんだから」

「そうそう、二人で聞いたの。まだポーカーで負けた罰ゲームを続けているって」

「なのにあの子、信じちゃって馬鹿みたい。商人の娘如きが次期侯爵のギルと付き合えるわけないのに！」

ピシリと、ギルを信じたかった心にヒビが入った。

「きやははは」と、嫌な笑い声が頭に響く。私はその場にいられず、忘れ物を教室に置いたまま女子寮へ戻った。

ガンガンと頭が殴られたように痛い。クラスメイト達の言葉が、毒みたく身体に広がっていく。

「恋人のギルよりも、私を嫌っている人達の陰口を信じるのか？　嘘を吐いているかもしれないの？」と理性が告げている傍ら、「仲間内の陰口でわざわざ嘘を付くのか？　複数人の証言があるのに？」と、尤もらしい理屈も同時に思い浮かぶ。

でも、もしギルからの告白が嘘だとすれば、色々と腑に落ちてしまった。

ギルは女子から人気だ。童話の王子様のような存在だからだ。優しく、頭が良くて、運動も魔法もできて、何より格好いい。金髪碧眼で、甘い顔立ちに、スラリとした体躯。ギルに惚れている女子は、きっと私の想像よりも多いだろう。

なのに、彼と付き合っていると公言しているのに、私は嫌がらせなど全くされなかった。例のクラスメイト達からも何も言われなかったこと。そして、ギル自身が、最近忙しいと言つてもう一か月近くともに会えていないこと。

休日は実家の侯爵家に帰ってしまうし、学校がある平日は「家業の勉強があつて」と授業が終わつて早々に男子寮に引込んでしまうのだ。昼休みも先生の手伝いやらで一緒にいてくれない日が多い。どこか、私に素っ気ないのだ。

思い返せば思い返すほど、ギルの些細な言動がクラスメイト達の証言の裏付けになっていくようだった。最後に顔を合わせたのはいつだっただろうか。私は寮へと続く渡り廊下から外に出て、人気の無い場所で涙を拭いた。

ギルベルトと初めて会ったのは、一年生、十六歳の秋の時だ。「君が調合学のペアだね。初めまして、僕はギルベルト。これから半年間よろしく」

後期の選択授業で、私は彼と実験のペアになったのだ。美しい金髪が、照明の光で輝いていたのが、やけに印象的だった。

「えっ？ あ、ああ……こちらこそ、よろしく願います」  
まさか高位貴族であるギルと一緒になるとは思ってもせず、私はどもりながら挨拶を返した。

だって彼は侯爵家の一人息子で、私は貿易商の娘だ。建前上、魔法学園では身分差は無いと謳っているが、実際は貴族と平民で透明な壁が仕切られている。二人一組でペアを組む場合、貴

族は貴族、平民は平民で教師達が組むはずだ。

一応、調合学の先生は成績順で選んだと言っていたが……何か裏があるのではと疑っていると、ギルは悪戯っ子のように笑った。

「何で自分が僕と実験ペアなのか、わからないって顔だね」

「い、いえ、そんなことは……」

「ううん、当然の疑問だよ。まあその……申し訳ないんだけど、君を利用させてもらったんだ。苦手な人と組まれるのだけは避けたくて」

ちらつ、とギルは斜め後ろの席に目をやった。視線の先には、いつも平民を虐めているグループの女子がいた。確か、伯爵家のご令嬢だったっけ。不服気な顔でこちらを見る彼女に対し、

「ギルは疲れた顔のため息を吐いた。

「あの子は、母が参加している絵画サロン仲間の娘だね。母を引き合いに出されて、やたらと絡まれるんだ。前期はそれで授業が大変だったから、後期はあの子以外と組ませてくれと先生に頼んでいたんだ」

「それが、どうして私に？ もっと適した方がいたでしょうに」

「成績順で、と付け加えたのが悪かったのかも。色恋沙汰なんだから、同性と組ませる配慮ぐらいは欲しかったな。ごめんね、こちらの事情に巻き込んだじゃって。できるだけ、君に迷惑はかけないから」

ギルは眉尻を下げて、本当に申し訳なさそうに謝った。王子

様のような見た目で悲しい顔を向けられると、許さない方がまるで悪者な気分になる。私は無意識に「気にしないで」と言っていた。

「もう過ぎちゃったことは仕方ないですから。どうせなら、私達のペアが一番になるぐらい、授業頑張りましょう？ それに、ここだけの話」

私はギルにそつと耳打ちした。

「私もあの子のこと、嫌いだったの。ちよつとスカツとしてます」

ギルはぽかんと口を開けて私を見た後、不意に吹き出した。

「ハハハッ！ 君、結構イイ性格しているね。気が合いそう  
だ」



「あなたと私が？　意外ですね、童話のような王子様が、そんなこと言うなんて」

「僕だって普通の人間だからね。あと、敬語はいらないよ。同級生なんだ。気楽に行こうよ」

「じゃあ、お言葉に甘えて。実は敬語好きじゃないから助かる」

「やっぱり君とは気が合うよ。僕も好きじゃない」

ギルの発言に、今度は私が吹き出してしまった。

この授業をきっかけに、私は彼と仲良くなっていた。

ギルベルトとは意外にも気が合った。彼が気安くてノリがよい性格だったからだろう。

「へえ。君の実家は海運業をしているんだ。ご両親が船乗りなのは大変じゃないか？」

「まあね。だからこうして寮付きの学校に入れられたの。面倒を見なくて済むし、箔付けもできるでしょう」

「君の将来を想ってだよ。魔法学校の卒業生には、政界の関係者も多い。商売をするのならそちらの方面と繋がれる口実を持つていた方が、何かと便利だろう？」

「すごいわ、ギルベルト。私の父親とほとんど同じこと言ってる。実は中身がパパだったりする？」

「ああ、そうだよ。愛しい娘よ。是非とも僕の事はパパと呼んでくれ」

「いやよ。貴族のご令嬢って大変そうなもの。私は気楽な庶民

のままがいいわ」

「残念。家出されてしまった」

授業中でも、ちよつとした冗談に付き合ってくれたり。

「また間違ってるよ、そこ。君は薬学関係は成績良いのに、他はてんでダメだね」

「また間違ってるよ、そこ。君って薬学関係は成績良いのに、他はてんでダメだね」

「う、うるさいなあ……。いいのよ、赤点さえ回避できれば。卒業したら学校の成績なんて皆忘れるんだから」

「多分僕は忘れないだろうけどな。一生覚えておくよ」

「優秀な記憶力の無駄遣いやめてよ。全く、私の周りには意地悪な人しかいないんだから」

「……………」

「あれ？　どうかした？」

「ううん、何でもない。ちなみに、その問題もスペルミスしているよ」

「うええ………」

テスト期間が近くなれば、調合学以外の勉強も一緒にしたり。

「久々の買い物楽しかったー！　付き合ってくれてありがとう、ギルベルト」

「僕も良い息抜きになったよ。最近は少し、ごたついて疲れていたから」

「深く聞いてもいいやつ？」

「……………ううん、あまり」

「そっかあ。愚痴りたくなったら教えてね。その時は、コーヒーでもご馳走してあげる」

「……ありがとう。お言葉に甘えて、一番高いのをお願いしようかな」

「わ、私のお小遣いの範囲でね……」

「ハハハッ、覚えておくよ」

休日は約束をして、近くの街にまで買い物をしたりもした。

何となく、ギルとの間には友人以上の雰囲気の流れで、私は明らかに好意を彼に向けていた。

ここまで親密になれば、付き合うのにさほど時間はかからなかった。

一年生の後期の終わりに、私はギルから告白されて、晴れて

恋人同士になった。ちょうど再来週、彼と付き合い始めて一年になる。

……でも、裏を返せば、あそこで告白されても嘘だとは疑えないわけ。

「全部演技だったのかなあ……」

私は自分の部屋で泣いていた。ベッドに寝転がって、枕に顔を沈める。

ギルが人を弄ぶようなことをするなんて、考えられない。彼は誠実で優しく、人を傷つけるような真似なんてしない。そう断言できるはずなのに……。

「じゃあどうして最近はずっと気ないの……?」

私はまたさめざめと泣き始めた。寮が個室で良かった。ルー

ムメイトがいたら苦情を入れられていただろう。

最近のギルは、実家の手伝いで疲れているのもあって、どこか私に冷たい。前まではハグしたり手を繋いだりしてくれたのに、ここ三か月ぐらいは多忙を理由に露骨に避けられている。

私悪い事しちゃったかな、もう好きじゃなくなったのかな、と不安になっているところに、クラスメイトの陰口だ。

内容もそうだが、何より、彼女達はギルと昨日会話したのだ。私は、会えもしなかったというのに。

「……う、うう……」

ひとしきり涙で枕を濡らしたあと、段々ギルに対して怒りが湧いてきた。

嘘告白ってなによ。ポーカで負けた罰ゲームってどういう

こと？ 私のこと弄んだっていうの？ ……ダメ、冷静にならないと。陰口を鵜呑みにせず、ちゃんと本人の口から話を聞かすべきだ。

明日、何が何でもギルから問い質そう。そしてもし、罰ゲームで弄んでいることがわかったら殴ってやるんだ。

私は泣き腫らした顔で気合いを入れたが、結局、それは叶わなかった。

なぜなら、両親が海難事故で亡くなったと、朝一に校長から伝えられたのだ。



「嵐で……船が難破……生存者は、無し……」

校長室に呼び出された私は、両親の訃報に言葉を失った。顔から血の気が引いていく。指先に力が入らず、詳細を記した手紙を落としそうになる。

「そんな……二人が、そんな……」

「気の毒ですが、話はまだ終わっていません。来期の学費についてです」

向かいに座っている教頭が、無情にも現実を突き付けてくる。

「振込期日は来月末までとなっていますが……もし支払いが困難な場合、退学手続きをしなければなりません」

「ま、待って、待って下さい……学費なんて、今しなければな

らない話ですか……？」

「我々も、慈善事業ではありませんので。少なくとも、親のいない平民の娘を在籍させるほど、我が校は優しくありません」

言外に「平民は金蔓だ」と告げる教頭を、隣にいる校長が宥める。

「まあまあ、教頭先生。この子にも考える時間は必要でしょう。弁護士も今日の午後には来訪する報せが入っています。今週末ぐらいには、結論も出ているでしょう」

……学費が支払えないなら、今週末で退学ということか。それが嫌なら、弁護士と話し合って金を捻出しろと。

きっと、無理だろう。積み荷の保険金が下りても、船員の遺族へ賠償金を支払う必要がある。おそらく莫大な額だ。遺産も

手元に残らない。学費を払える余裕など、到底あるはずがない。それを理解しているからこそ、目の前の二人は横暴な態度を取っているのだ。だけど、反論する気力など、私には無かった。

「……わかりました。今日はこれで、失礼致します」

涙を堪えながら、私は校長室を後にした。ギルに縋りつきたかったが、ちょうど彼は、実家の急用で今日から学校を休んでいるとのことだった。

結局、弁護士と話しても私の予想は覆らず、学校を退学する運びとなった。

日曜日の早朝。私はトランクを一つ持って、とぼとぼと校門

へ続く石畳を歩いていた。

とりあえず私は、親戚の家に厄介になることになった。長居するつもりはない。さっさと仕事を見つけて出るつもりだ。

退学の手続きはもう済ましてある。あとは汽車の時間に間に合うよう、馬車で移動するだけだ。

ふと足元がふらついたが、何とか踏ん張って転ぶのは防ぐ。両親が亡くなってから、生きた心地がしない。今もまだ夢なんじゃないかと、心の隅で願ってしまっている。

ため息を吐く余裕すらなく、鉛のように重い脚をただひたすら動かした。すると、前方から聞きなれた声で名前を呼ばれた。

俯いていた顔を上げれば、そこにギルがいた。

「ギル……」

「こんな朝早くからどうしたんだ？ 荷物まで持って」

久々に見たギルは、疲れた様子だった。目の下に薄っすらと隈があり、髪も寝癖の跡が残っていた。

「……ギルこそ、お家の用は済んだの？」

私が目を合わせれば、やはりギルはすいっと気まずそうに顔を逸らした。

「まあね。学校を長く休むわけにはいかないから、寝台列車で帰ってきたんだ。おかげで寝不足だよ」

「そう……」

忙しくて新聞を読んでいないのだろうか。父の商会が倒産したことは理由と共に大きく取り上げられていたのに。

……興味ないのかな、私の事なんて。

やっぱり、弄んでいたのかな。あのクラスメイト達が言っていたように。

悪い方向にばかりぐるぐると物事を考えてしまう。私が黙ったのを見て、ギルが慌てて慰めてきた。

「ごめん、しばらく会えなくて。来週は休み取れたから、久々に一緒に過ごそう」

「……それよりも、今から話したい」

「今から？ ……それはちょっと難しいな。このあと溜まった課題をこなさないといけないし……」

ギルはちらりと私の手元を見た。

「君も、これからどこか行くんだろう？ 明日なら空いているから、明日でも良い？」

……ギルは悪くないと、頭ではわかっている。

だけど、もう私には事情を話す気力が無かった。両親の訃報を知った直後ならともかく、様々な手続きや今後のことについて追われ疲弊し、かつギルを疑っている私には、土台無理な話だった。

「……うん。やっぱり大丈夫。ねえ、ギル」

私が限界だということに気付いてほしい、引き止めて欲しいなんて思うのは、我儘なんだろうな。

私がギルに一步近づけば、彼は怪訝そうな顔をした。

「どうしたの？」

「キスしてほしいな」

「え……!？」

ギルはわかりやすく狼狽えた。「ここは人目が多いから、その……」とまごつく様子は露骨に焦っていて、私には嫌がっているように見えた。

……罰ゲームで付き合った女と、キスなんてしたくないか。そりゃあ、そうだよね。

「——冗談だよ。馬車待たせているから、私そろそろ行くね」

「な、なんだよもう……気を付けてね」

「うん、ありがとう」

そう言ってギルの横を通り過ぎ、校門を抜ける。背後から、ギルの声が聞こえてきた。

「週末は空けといてね！　じゃあ、また明日！」

私は振り返らずに、無言で馬車に乗った。



それが最後に交わした、ギルとのやり取りだった。

「すみませーん。下級ポーション追加三十本お願いしまーす」

薬屋の作業場で、受付の声が響く。薬草の仕分けを止めて顔を上げれば、背後にいた先輩が文句を言った。

「またあ？ 今日、受注数多くない？」

「大口の注文が入ったみたいなんです。明日中にできますか？」

「瓶の在庫が足りないよ。買ってこないと」

「あ、私行きますよ。お昼休憩取ったあと買ってきます」

「ほんと？ 助かるわー、ありがとう」

店員達で揉める前に手を挙げる。ちょうど作業もキリの良い所で終わったところだ。昼食を取るついでに買い出しを引き受

けて、私は店から出た。

今の薬屋に勤めて、そろそろ三年が経つ。職場の同僚は皆良  
い人で特に不満は無い。強いて言えば、家と職場の距離が長い  
くらいか。それも我慢できる範囲であるけど。

現状をそれなりに楽しんでる。なのにどうして、あの時の  
夢を見てしまったのだろう。

三年前、両親の死をきっかけに私の生活は激変した。

魔法学校を辞め、地方にいた親戚に厄介になりながら仕事を  
探し、働き口を見つけたらすぐに家を追い出された。学生時代  
得意だった薬学と言えど、実際に働くとなるとまた別だった。

慣れない仕事に何度もミスして、上司や先輩に怒られて心が  
折れそうになりながらも、私には帰る場所が無いから働き続け

るしかなかったのだ。

必死に勉強して毎日生きることだけを考えて、ようやく仕事を順調にこなせるようになったと思ったら、あつという間に三年が過ぎていた。大人になったら体感時間が速くなるというが、本当だったなあと、街の広場でパンを食べながらしみじみ思う。心に余裕ができたから、過去のことを無意識に振り返ることができたのだろうか。

それとも……目を逸らしていた後悔が、今になって押し寄せてきたのか。

「……はあ」

ギルに何も言わず去った過去の自分に、私は呆れていた。精神的に余裕が無かったとはいえ、あんなのただの八つ当た

りだ。嘘告白の真偽も定かではないのに、決めつけてしまったし。本当に今更かもしれないが、手紙の一通でも出した方が良いかもしれない。

昼食を終えて、藥屋の取引先でガラス瓶を買う。店員が用意している間に便箋を物色したが、結局どれも手に取らず店を出た。

私がギルの立場だとして、昔の恋人に謝られても困ると思い直したからだ。

二年前、彼の父が亡くなって当主の座を継いだことは風の噂で聞いていた。現侯爵であるギルと、一介の平民である私では身分差がありすぎる。下手に連絡すると周囲が下種な勘繰りをするかもしれない。なあなあにしておいた方が互いのためだろ

う。

瓶が入った木箱を両手で運びながら、薬屋へと戻る。そろそろ店の看板が見え始めるところで、表の入り口に立派な馬車が止まっているのが見えた。家紋入りのそれは見覚えがあったが、どうにも思い出せない。

貴族らしいということは馬車の装飾からわかったので、客の邪魔にならないよう裏口へと回ろうとした、その時だった。

「――待って、その君」

ぐいっ、と腕を後ろに引っ張られる。その衝撃で身体の前を崩し、木箱を落としてしまった。「あっ」と声が出る前に、地面からガラスの割れた音が聞こえてきた。

やってしまった。どうしてくれるのよ、と腕を掴んできた人

物に弁償させてやろうと、後ろを振り返って、言葉を失った。

「……っ、あ、あなたは」

すらりとした体躯に、陽の光を浴びて輝く美しい金髪。童話から飛び出してきたような王子様のような姿。逆光で表情は暗く見え辛い、顔つきは三年前と比べて大人になっていた。

ああ、そうか。馬車の家紋は、彼が使っていたハンカチのそれと同じだったから、既視感があったんだ。

「やっど……見つけた」

三年ぶりに再会したギルベルトが、私の腕をさらに強く掴んだ。

「ごめんなさい、待たせてしまっ」

「いや、突然押しかけてきたのは僕の方だ。迷惑をかけて申し訳ない」

仕事を早退し、私はギルと待ち合わせした広場へとやってきた。

侯爵の来訪に勤め先は少々騒がしくなったが、彼が大口の注文を予約したことで黙らせたのだ。

私を少し借りたいと言うギルに、金に目が眩んだ店主は「どうぞどうぞ」と私を早々に上がらせた。ギルと話し合うのは氣まずいが、同僚達に根掘り葉掘り聞かれるのも嫌だったため、その点は店主の氣遣いが有難かった。

ギルは広場の噴水に腰掛けていた。場所を移すかと思ったが、彼は座ったまま隣に視線をやった。座れということか。私は周



囲の視線を気にしながら、拳二個分ほど距離を開けて、ギルの隣に座った。

「えっと……その、お久しぶりです。アムニエル侯爵」

「……どうして敬語？」

「えっ？」

「そんな堅苦しくしないでいいだろう。誰も、僕達のことなんて気に留めないさ」

「……いいえ。私達はすでに終わった関係です。誤解は生まれないよう、細心の注意を払うべきです」

「……………」

私がきつぱりと告げれば、ギルは真顔で黙り込んでしまった。怒っているような雰囲気になっただけ、すぐにギルは

「そうだね」と肯定した。

「もうあの日から、三年も経っている。僕達にとって、十分に長すぎる期間だ」

「ギル……くしゅっ」

ギルの大人の対応にホッとした途端、私はくしゃみをしてしまった。

もう秋の終わりだからか、まだ昼間なのに少し肌寒い。腕を擦った私に、ギルが立ち上がる。

「寒いね。場所を移そう。僕が泊る予定のホテルでも良い？  
一階のラウンジなら、ゆっくり話もできるだろう」

「い、いえ、お気遣いなく」

「僕も肌寒いと思っていたんだ。まだ御者も帰させていないし、

丁度いい。来て、こっちだ」

私の返事を待たず、ギルはさっさと歩いてしまった。仕方なしに、私も彼の後を追う。

馬車は広場の外れに留めてあった。侯爵家の家紋が施された扉をギルが開け、先に中へ通される。

密室に二人きりは不安があったが、ギルももう割り切っているようだし、襲われるようなことはないだろう。そう思って座席に腰を下ろした際、自分の服装が作業着のままだと気が付いた。

流石に薬草の匂いが染みたワンピースではホテルのラウンジに相応しくないだろう。着替えのため先に私の家に寄って欲しい、とギルに伝えようとした直後、激しい眩暈が私を襲った。

「……………っ!?!」

視界が歪み、座ってすらいられず、思わず隣のギルに寄りかかってしまう。謝罪して離れようとしても、彼は私の肩を抱き寄せ、さらに密着してきた。

「不用心だな……昔も今も、君は変わっていない」

ギルの声が聞こえても、モヤがかかった頭では言葉の意味を理解できなかった。微かにわかったのは、その口から「眠り」の呪文が唱えられていること。抗おうにも本能が魔法に逆らえず、瞼が段々と重くなっていた。

「やっと見つけたんだ。もう、絶対に逃がさない」

ギルに頭を撫でられながら、その言葉を最後に私は意識を失った。

ぐちゅぐちゅ、ぐちゅっ♡

「ん、う……♡」

ぐちゅぐちゅぐちゅ、ぶちゅっ……♡

「ふ、あ、あ……♡♡」

どこからか、果実を潰したような音が聞こえてくる。

お腹が熱い。身体がふわふわする。まるでぬるま湯に浸かっているような気分だ。

でも、足の間に違和感がある。なんで私、大股になっているんだろう。それに右足がやけに重い。身体を動かす度に、不快な金属音がする。それでも腰を振らせていると、頭上から笑い声が聞こえてきた。

「びくびくして可愛いね。まだ起きないかあ」

声の主の言葉と共に、太腿の裏を撫でられる。

今、私の身体を弄っているのって、まさか――

「そろそろ目覚めてほしいんだけど」

ごりゅっ！♡

「おっ！？♡♡♡」

殴られたような強い快感に、思わず目が覚める。背中の感覚で、ベッドに仰向けになっていることに気が付く。しかも、全裸でだ。

な、なんで？ 私、確か馬車に乗って……それで……

状況に困惑しながら違和感のある下半身を見れば、足の間にギルがいた。彼は私の蜜壺を指で弄りながら、にこやかに笑う。

「おはよう。やっと起きたね」

「えっ？ あ、な、なに」

無意識に身体を退けば、じやらつと右足から鎖を引く音が聞こえてきた。右足首に足枷が嵌められていたのだ。鎖はベッド下まで続き、まるで、私を拘束しているようだった。

「ひっ……な、なに、これ」

「二日も寝ていたんだよ、君。拘束しても中々起きないから……こうして、ちよつと意地悪させてもらった」

「んおっ！？♡♡♡」

私が驚いている間もギルは手を止めず、ずちゅずちゅと♡とナカを擦る。腹の裏側を曲げた指で小刻みに抉られる度、目がチカチカする程の快感が襲ってきた。

「ひいっ!？♡♡ や、やめっ♡♡♡♡ へんっ!♡♡♡♡ そこ、  
へん、だからっ!♡♡♡」

「知ってる。さっきからここ触ると、ひっくい声出てたし。そ  
んなに気持ちいいんだ」

「いあっ♡♡♡ や、やめへっ♡♡♡ なんか、くるっ♡♡♡  
や、やらあ……、~~~~っ♡♡♡」

ずくずく♡と下腹部が切なくなっていく。甘い熱を逃がすよ  
う、腰が勝手に浮いてしまう。止まらない愛撫に成すすべはな  
く、私は呆気なく高みに昇った。

「ふっ、あ、あ——……♡♡♡」

喉を仰け反らせながら、びくびく♡と痙攣する。呼応するか  
のように数回、鎖を擦る音が部屋に響いた。絶頂の疲労でベッ



ドに身を沈めている私に、ギルが内腿にキスをしてくる。

「ナカで上手にイけたね。覚えが速くて助かるよ。これならすぐに堕とせそうだ」

そう言ってギルは蜜壺から指を抜くと、愛おしそうに私の腹を摩ってきた。

よく見れば、腹には臍の下——ちょうど、子宮の辺りに何か描かれている。ぞわっと背筋に悪寒が走り、私はすぐさま起き上がってギルの手を払った。

「さっきから一体何なの！？ ギル！ あなた、私に何をしたの！ どこに連れてきたのよ！？」

シートで身体を隠しながら彼を糾弾すれば、ギルは「やっと名前を呼んでくれたね」と自分の手を擦った。